



文化

地域貢献「文化」

経済力の高さは豊かな文化を生む。ここ小樽でも例外ではない。一人前の財界人として認められるためには、文化的な素養を欠かすことができず、著名な建築家や腕のいい大工棟梁に社屋や邸宅を任せることも当然であった。これらの建物が現在まで遺り、観光資源として今日の小樽経済を動かしている。

小樽の文化というと、建築では色内通りや運河沿いの華やかな世界に目が向きがちであるが、一方で地域に親しまれてきた建築が幾つも遺されている。特に宗教建築に見られ、式典や祭事、葬礼など日常生活に欠かすことのできない施設である。神道、仏教、キリスト教など宗教によらず、いずれも豪華で大規模ではないが、堅実な仕事ぶりが好感を抱く建築である。こうした建築も確かに小樽の歴史や魅力を語ってくれる。

地域で親しまれてきたと言えば、地元小樽の建築請負業・大虎の加藤忠五郎（1856～1930）を見逃すことができない。その仕事は、小樽市公会堂（明治44年）を筆頭に、岩永時計店（明治29年）、百十三銀行小樽支店（明治41年）、北海道銀行本店（明治45年）、板谷邸（大正15～昭和2年）、住吉神社社務所（昭和9年）など、宗教建築から銀行建築まで幅広く手がけ、小樽の建築文化を現在まで支えている。また、小樽のみならず札幌や樺太でも建築工事を請負い、戦前の北海道建築界を語る上でも欠かすことのできない存在である。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 60 号 龍徳寺本堂



所在地／小樽市真栄 1 丁目 3-8

建築年／明治 9 年 (1876)

構 造／木造平家

小樽を代表する寺院建築の一つ。寺の創設は安政 4 年 (1857)、函館の高龍寺 18 世和尚の発願にまで遡る。明治 7 年 (1875) に現在地へ移転し、2 年後に現在の本堂が新築された。小樽に現存する寺院本堂の中で最も古い。本堂の平面は奥から、内陣と両脇の間、外陣の三間、正面の縁と並び、松前の龍雲院本堂 (天保 13 年 (1842)) や法源寺本堂 (明治 7 年頃) と共通している。内部は組物や彫刻欄間をはじめ、特に外陣で、本格的な寺院建築の構成と要素を見ることができる。外陣中央の天井は小組格天井、両脇の間は竿縁天井としている。棟梁は佐州 (佐渡) 出身の北見八百蔵、脇棟梁は越後 (現新潟県) 蒲原の古山仁三郎である。昭和 8 年に寄進された、直径約 1.35m、重さ 330kg の巨大な木魚も有名である。

正面左側の本堂と廊下で結ばれた金比羅殿は、明治 22 年 (1889) の上棟。棟梁は明治期に小樽で主要建築を手がけた加藤忠五郎である。

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 12 号

小樽区公会堂



所在地／小樽市花園 5 丁目 2-1

建築年／明治 44 年 (1911)

構 造／木造平家

小樽区公会堂は、皇太子（後の大正天皇）行啓のための「御旅館」として、小樽の実業家・藤山要吉の寄附により建築された。藤山の依頼にて加藤忠五郎が施工を手がけ、東京の宮内庁へ出向き、技師・木子幸三郎から指導を受けた。

建築は当初、現在の小樽市民会館の敷地にあり、通りに面した本館と奥の御殿から構成されていた。本館は入母屋屋根瓦葺きの正面中央に千鳥破風を乗せ、その下部には唐破風の車寄せを設けている。廊下を挟んで広間を二間配し、外周三方に廊下を巡らせた左右対称の平面であった。御殿は入母屋屋根で、一の間、二の間、三の間の続き間からなり、板敷と畳敷の広縁を二重に設けている。入母屋屋根で当初杉皮葺きであったが、後に銅板に葺き替えられている。昭和 35 年（1960）に市民会館建設のため、約 50m 離れた現在地へ曳家、本館と御殿の配置と建物の基礎部分を変更し、岡崎家能舞台が配された。

現在／小樽市公会堂

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 12 号

岡崎家能舞台



所在地／小樽市花園 5 丁目 2-1

建築年／大正 15 年（1926）

構造／木造平家

実業家・岡崎謙が入船の自邸内に建てた能舞台である。全体に本格的な和風建築の趣で、蟄股、笈形といった部材も用いられている。屋根は二軒（出の異なる上下二段の垂木）の入母屋で、亜鉛鍍鉄板葺き。棟の鬼瓦は創建時には木製で、現在、小樽市公会堂に保存されている。外からは確認できないものの、小屋組を金物により緊結するなど、積雪荷重を考えた工夫の跡も残されている。

現在／小樽市公会堂能舞台

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 29 号

小樽組合基督教会



所在地／小樽市花園 4 丁目 20-18

建築年／大正 15 年（1926）

構造／木造 2 階建

小樽市公会堂と岡崎家能舞台の建つ小樽公園へ向かう、公園通り沿いの角地に建つ。角に建つ 2 階礼拝堂への階段塔、大きな三角形の切妻屋根と妻面に開けられた大窓が、地域のランドマークとなっている。塔の軒下の装飾、大窓の尖塔アーチなど、全体はゴシック風の意匠でまとめられている。設計は小樽市建築課長・成田幸一郎、施工は地元・小樽の高橋権次による。かつては組合教会の名前で親しまれていたが、昭和 16 年（1941）には日本基督教団に加入し小樽公園通教会と改称している。

現在／小樽公園通教会

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 61 号

住吉神社社務所



所在地／小樽市住ノ江 2 丁目 5-1

建築年／昭和 9 年 (1934)

構造／木造平家

住吉神社は、大阪の住吉神社の御分霊を受け、明治元年（1868）オタルナイ運上屋と高島運上屋に御神体を祀ったのが始まり。同 32 年に現在地へ移転。社務所は、昭和初期の北海道で、木造の社務所の中では最大規模である。車寄せには唐破風の屋根を載せ、主屋に切妻反り破風を飾る。この形は、小樽区公会堂（明治 44 年）とよく似ていて、ともに建築工事は大虎・加藤忠五郎関わった。

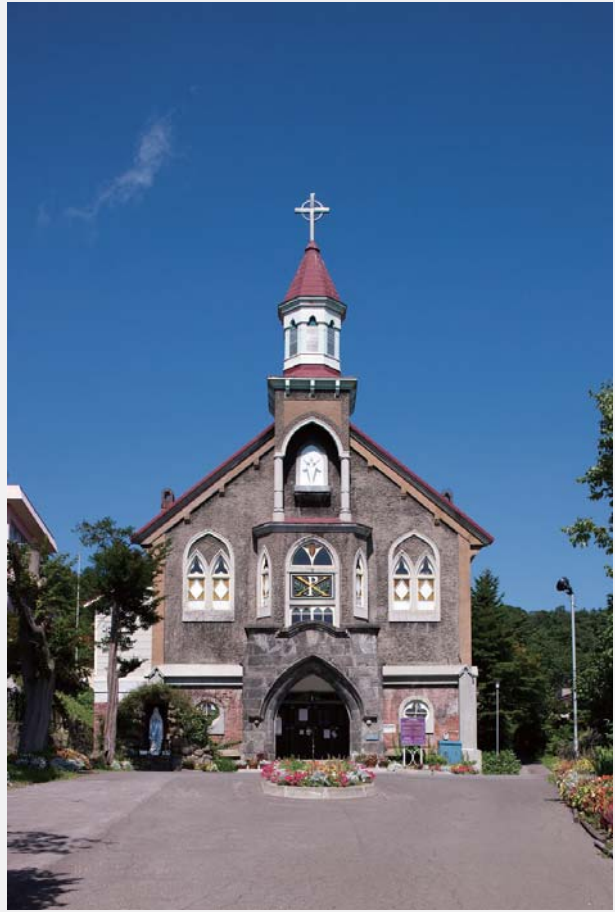
text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 70 号

カトリック富岡教会



所在地／小樽市富岡 1 丁目 21-25

建築年／昭和 4 年（1929）

構 造／木造一部鉄筋コンクリート造 3 階建

急勾配の赤い切妻屋根と八角形の鐘桜が、印象的な稜線を造り出す、教会らしい建築である。ゴシック様式の要素である尖塔アーチが随所に用いられている。集会所のある 1 階壁面の煉瓦と軟石積みの玄関ポーチ、聖堂のある 2 階正面壁面の漆喰仕上げが、程よく風化している。設計・施工は、北星学園創立百周年記念館（1926 年）など、建築家マックス・ヒンデル（1887～1963）設計の建築を請け負った三浦才三（三浦建築工務所）とも伝わる。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 46 号

花園町会館



所在地／小樽市花園 4 丁目 3-8
建築年／昭和 2 年（1927）
構造／木造 2 階建

小ぶりながら正面の垂直性が高く、左右対称のデザインが目を引く建築。よく見ると、正面頂部の模様、凹凸のある壁面、玄関の腰折れの破風など、設計者のこだわりが見られる。設計は地元小樽の萩原米治郎による。会館の運営は、周辺の 6 町内会が出資する有限会社により行われている点もユニークであり、町内会や葬儀、地域交流の場として人々に親しまれている。

現在／花園会館

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 28 号

小樽聖公会



所在地／小樽市東雲町 10-5
建築年／明治 40 年（1907）
構 造／木造平家

聖公会とは英国国教会の系統に属する教会のことである。小樽聖公会は明治 13 年（1880）に宣教を開始し、同 28 年（1895）頃手宮に小樽聖公会講義所を構えていた。その後焼失したため、同 40 年現在地へ再建された。水天宮へ上る石段の脇に小じんまりと建つ、左右対称の正面が印象的な教会である。中心軸に切妻の 3 つの屋根（玄関、母屋、尖塔）が並び、玄関脇の窓も左右対称に配される。軒のレース状の装飾は、アメリカで流行したカーペンター・ゴシックの特徴といえる。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 49 号

天上寺本堂



所在地／小樽市入船 4 丁目 32-1

建築年／明治 23 年 (1890)

構造／木造平家

天上寺は明治 13 年 (1880)、開運町 (現奥沢十字街付近) で浄土宗函館中教院小樽出張所を開いたのが始まりである。外観は長野市の善光寺に倣っている。屋根は入母屋造りで、寺院建築では珍しく妻入り (妻面に入口を設ける平面形式) とし、四周に裳階 (軒下の外壁側に差し掛けられる庇状の構造物) を廻らす。本堂右手の書院は、塩谷の中山家番屋を移築したものである。

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 50 号

水天宮本殿・拝殿



所在地／小樽市相生町 3-1

建築年／大正 8 年（1919）

構造／木造平家

水天宮は市街地の丘陵にあって、小樽港や小樽の街並みを一望できる場所にあり、小樽で散策する場所を確かめるのにも優れている。手前の拝殿は入母屋造りの屋根に3つの千鳥破風を載せ、開口部に蔀戸（格子に板を張る建具）を入れる。奥の本殿は流造りで、屋根に置千木と5本の堅魚木を載せる。施工者の伊久治三郎は、大正2年（1913）竣工の現北海道神宮に携わった、優秀な棟梁であった。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 59 号

徳源寺本堂



所在地／小樽市塩谷 2 丁目 25-1
建築年／明治 30 年 (1897)
構造／木造平家

文久 2 年 (1862) 創立の徳源寺は、北海道の禅宗寺院に見られる本堂と龍神堂を併置する形式である。本堂は入母屋屋根、平入り (屋根妻面の垂直方向に建物入口を設ける方法) で、正面中央に唐破風を架ける。棟梁は伊久治三郎で、明治から大正期の小樽で活躍し、水天宮本殿・拝殿や浄心寺本堂を手がけた。龍神堂の建築年は、様式的に本堂と同じころと推察されている。

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)
photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 58 号

恵美須神社本殿



所在地／小樽市祝津 3 丁目 161

建築年／文久 3 年 (1863)

構造／木造平家

恵美寿神社本殿は、忍路の津古丹稻荷神社本殿（嘉永 2 年（1849））と並び、小樽の江戸時代の遺構 2 構の一つである（潮見台の宗円寺本堂（江戸時代に建築、明治 42～44 年移築）は平成 12 年解体）。神社創立は本殿建築の 7 年前、安政 3 年（1856）にまで遡る。本殿は一間社流造で、現在は鞘堂に納まっている。拝殿、幣殿、鞘堂は昭和 3 年（1928）から 5 年にかけての建築である。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.